



令和7年度とうきょうすくわくプログラム

活 動 報 告

テーマ1：『光と色と影』

6月 エピソード① この光どこから来るのかな？ 年長児

『この光どこから来るのかな？階段上ってるみたい！』

子どもにとってとても身近な自然現象である光。大人は気にもとめていなかったが、子どもにとってはこれも不思議の一つ。Yくんは周りを見渡して

『あそこかな？あの窓！』と排煙窓を見上げて言う。そしてその光の上に足を合わせて、階段を上って行った。今年度のテーマ設定として、このような、日常の気づきを取り上げる意味もあってまさにと思う瞬間だった。



7/5 エピソード② とにかく触れて試してみる 年少児

テーブルライト・ライトトレイ・イチゴパック・ゼリーカップ・カラーセロハン・水・セロハンを貼ったトイレットペーパーの芯



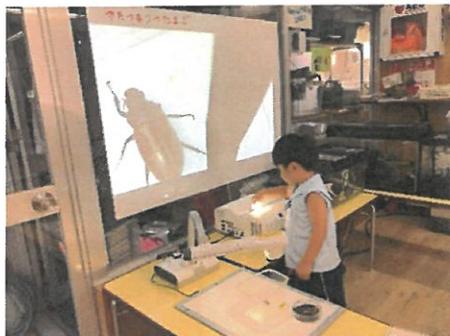
セッティングを始めると早速年少組の3名が集まってくる。はじめは出してあった物を目に近づけて「幼稚園が赤い！」等と言っていたが、そのうちセロハンを小さくちぎり始めた。テーブルライトの上にちぎっては並べて「きれい」「光ってる」等と言っていたが、そのうち、ちぎった物をゼリーカップにぎゅうぎゅう詰め込み始めた。活動が行き詰まりそうだったので、保育者が水をトレイの中に入れてみる。すると、水の上からセロハンを押し当てて「ぶくぶく見えた！」「ぶくぶく動いてる！！！」と仲間とその感触や気泡の動きを楽しんでいた。

7/10 エピソード③ 『何で映ったの？』 年少児・年長児

デジタルプレゼンター・プロジェクター・カナブン（虫）

年長児がデジタルプレゼンターで虫の観察をしている傍で、年少Aくんが自分も触ってみたくて、手を伸ばす。『あれ？今、手が映った。何で？』『ここに（スクリーン）にAの手が映った！』スクリーンに向かって手を振っている。そのうち、プロジェクターに光っている部分があることに気づき、そこに手を当てる。『あっ！映った！！』『映ったけど黒い…』プレゼンターでは、手の色が映っていたのに、プロジェクターでは影となっ

ていて色が無いことに気づく。保育者は「Aくんの手だけ黒いね。何でだろう？」と声を掛ける。すると、観察していたカナブンが入っている観察ケースをプロジェクターの光部分に置いてみる。『あれ？映ったけど黒いな…』疑問を感じ、今度は近くに置いてあった昆虫に水を吹きかける為のスプレー容器をそこに置いてみる。『キラキラしてる！きれい。』『キラキラが強い』そしてボトルの向きを変えるとボトルの模様が反射してスクリーンに映った。『あれ？色がついた!!!』色々試してみても、疑問から発見へ…そしてまた疑問がうまれ…。それを見ていた年長児が『これは影じゃない?』と一言。年長児は、感覚的に分かっている様子。

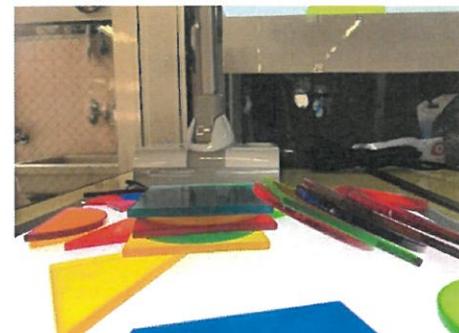


7/15 エピソード④-1 『あっ！オレンジになった!』

年中・年少児

イロイロモザイク・デジタルプレゼンター・テーブルライト・スクリーン

登園時間に合わせて数枚のイロイロモザイクを並べて、プレゼンターでスクリーンに映しておく、仕度を終えた数人が集まってきて触り始めた。モザイクを並べて映しては『きれい!』などと言っていたが、そのうちNちゃんが、二枚重ねて目に当てて覗いて『先生オレンジになった!!』と言ってきた。「本当だ! どうやったらオレンジになったの?」と聞くと、『ピンクと黄色!』『ここに置いてみたら?』と、テーブルライトの上に置いてみる事を提案する。『あっ! オレンジ!』 それを見て他の子ども達も次々に色の混ざりがどうなるのか…を試し始めた。

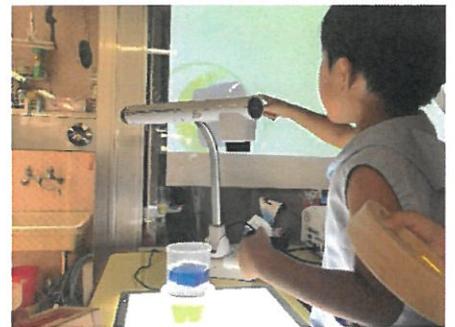


7/15 エピソード④-2

食後…午前中の活動の様子を見ていた園長が、新しい教材ウォーターブロックを出してくれた。朝から引き続き取り組んでいる子がその経験を新しい教材でも試している。ウォーターブロックも重ねると色は変化することを発見し、喜んでいる。そこへ、Hくんがやって来て、手に持っていたBブロックで作った電車をかざし始める。保育者は「あれ？何でこっちのブロックは、重ねても色が変わらないのかな？」と問いを出す。Nちゃん『水みたいになっていないからじゃない？』 Hくん『水に入れたら色が混ざるかも！』保「じゃあ、やってみよう！」と廃材入れから透明のカップを探してきて水を入れて2つ渡してみる。(⇒大人の感覚で透明カップを選択してしまったが、不透明の物を渡しても良かった。子どもに選ばせるべきだった。)



Hくんは、そのカップの中に一つずつブロックを分解して入れ、ライトの上に置き、カップを重ねてみたり、位置を動かしたりして確かめている。その横で静かに、先ほどは混ざらなかったウォーターブロックの上にBブロックを重ねる方法を逆に、Bブロックの上にウォーターブロックを重ねて確かめているHAくんの姿もある。するとHくんが『あっ！出てる！』とスクリーンを指さす。水に反射して黄色が映っていた。しかし、色は混ざっていない。その後も二日間、この方法で色の混ざりについて確かめを行っていた。



7/17 エピソード⑤ 光を運ぼう 年中・年少児

鏡（一人一枚）

預かり保育の時間、保育者が鏡で遊んでいる姿を見せる。そこへ『何やってるの？』『やりたい！』と数名の子どもが集まってくる。一人ひとりに鏡を渡す。保育者は光を反射させて、園舎の壁等狙った的を口にしながらかそこに光をもっていく。『どうやるの？』『なんで先生だけ光ってるの？』と不思議そう。「鏡に光を当てると遠くまで運べるんだよ。まず、自分の鏡に太陽の光がどうやったら当たるか、いろいろ動かしてごらんよ。」という、あちこちで反射した光が見えるようになった。『できた！』『でも、皆、自分の光がどれか分かっている？』『わかんない。』そこで自分の足元に光を当ててみる事を提案する。(年中児はすぐに出来る。年少児もその様子を見てしばらくすると出来た。)保「自分の光が見つかったら、遠くまで運んでみよう！どこに運びたいか自分で決めてごらん。」子ども達はそれぞれの的を決めて、光が届くと『やった～！』と嬉しそうに繰り返す。そのうち、『光で捕まえる！』と通りかかる職員の顔を数人で狙ってみたり、友達の光を踏む遊びに展開していった。



12/10~11 エピソード⑥-1 葉っぱと光 全学年児

園庭で探した葉っぱや花（数種） テーブルライト



葉っぱをかごに入れてテーブルライトをつけて出しておく。今回は、光を十分に感じられるように、階段下の薄暗いスペースに設置するようにした。気づいた子ども達が『何やるの?』と集まってきたので「お庭から葉っぱを持って来たんだ!」とテーブルライトの上ののせてみる。『わーきれい!』『やりたい』と、好みの物をかごから取り出して、ライトの上ののせはじめる。そのうち『こっちの葉っぱは光っているけど、こっちは暗い』とそうでない物がある事に気づく。以前の経験（イロイロモザイク等）から『くっ付けたら（重ねたら）色変わるかな?』と言う子もいる。やってみるが、それはできない事が分かった。そこで、ウォーターブロックを出して「これはどう?」と提案してみた。『あっ!色変わる』『葉っぱがお水に入っているみたい!』二色・三色と重ねてみたりしながら、思い思い確かめてみる。ウォーターブロックを重ねて同じ様な色を作り、その上に葉をのせ、『同じ!!』という子もいる。



その中で…
『色の上に葉っぱをのせたら、赤は同じだけど、黒い線も見える。』
『ブロックと形、同じ線。』
縁が影になっていることを見つける子もいた。

エピソード⑥-2



色の混ざり方に興味のある子が多かった為、青いビー玉と同じ大きさのオレンジと黄色（どちらも不透明）のスーパーボールを出してみる。ビー玉『同じ色の上ののせると同じ色。黄色にのせたら緑になった!』スーパーボール『赤にオレンジのせたのに、黒に見える。なんで?』その後、色が見えそうな物をいろいろ見つけて、ライトの上ののせて確かめている。



その中で年長児Rちゃんが、ウォーターブロックを2色重ねその間に葉やスズランテープ等を挟み、トイレットペーパーの芯で覗き始めた。（見たい所だけを切り取って見ている感じ）

『この中海みたい!』『葉っぱが泳いでる!』という、周りにいた満三歳児が『見せて!』『見たい!』と、興味を持って声を掛ける姿があった。答えが無く、ただ興味のまま試してみる活動の中で、こうした年齢を超えた交流が生まれることも、この活動の良い所だと私は思っている。

12/16 エピソード⑦ どんな形に見える? 年中児

園庭

特別な準備はなし。あえて雲の多い日を選んで実施。太陽の光が届いている時と、そうでない時の違いを感じる。



興味を持ちそうな子に『私の影どれだ?』と声を掛ける。『え〜大きいからコレ』等と反応する。すると子ども達の方から『こうするとピクミンみたいでしょ!』と結わっていた髪の毛を立てて、影を見せてくれた。

「あれ?手をつないでいないのに、影を見ると手をつないでいるみたい」と声を掛けると、

『ぶつかってる(重なっている)ところは、見えないよ。』と、重なっているところは、一つに見えるところに気づく。実際の姿と異なって見えることに興味を示す。



そして『これはどう?』『ゆきだるま』『見える?』と二人で形を作りはじめた。



そうこうしているうち、影が見えなくなる。『あっ!影見えない』『お日様はどこ?』『多分あそこだね。雲が光ってる!!』『いつ見えるかな?』と空を眺めて話していた。



1/23 エピソード⑧ ぴかりんゲーム 年長児・年中児・年少児

園庭 鏡(一人一枚) スタート・ゴールの表示 養生テープ

子ども達に「ぴかりんゲームしない?」と声を掛け、『どうやるの?』と興味を持った子どもとまず始める。星のイラスト表示を見せ「これを鏡の光で光らせるゲームよ。』『前やったから簡単だよ!』『今日は、前とは違ってスタートの場所があるから、そこから光らせられるか!前より難しいかもよ!!』と課題を説明



する。まずは、保育者が容易に達成できる場所にスタートとゴールを設定する。

2学期、何度も反射させることを楽しんでいた子ども達は『簡単!!』とすぐに達成できた。そこで、「レベル2」とゴールの場所を移動する。今度は少し角度を変えて平行にちかい位置に設定する。角度がなくなった為、『あれ?私の光はどれ?』目指す方角と反射された光の行方のイメージが変わって、多少工夫が必要になった。年中児年長児はそれでも、その難しさを楽しんでいる様子だったが年少児は何度か挑戦した後、諦めて、ゴールの目の前に行つて的に光を当てていた。鏡の向きを調整して、何とか光を届けることが出来た子ども達は『もっと難しくしたい!!』と意欲を見せた。そこで「じゃあ、今度はどこにゴールを作る?」と子ども達にゴールの場所を決めさせる。数人で相談して、スタートから障がい物を挟んで、かなり遠い場所に設定した。この位置では、数名で中継しながら光を届けないとならない。まだその距離は難しいと思つたが、そのような状況に誰か気づく子どもがいるか…と、とりあえず挑戦してみる。「お友達と協力したらどうかな?光を運ぶ方法ない?」と提案はしてみたものの、年長児でもまだそのような手法は思いつかない



報告者

副園長 小幡 みのり

小平姫百合幼稚園・ひめゆりこども園

2. 身体表現としての音作り

～音作りを通して子ども同士の関わり～

目的と設定理由

民族楽器の始まりは文化的な流れと、感覚運動的な関わりから形作られたといわれている。子どもの興味関心を刺激し、音階楽器よりも打楽器のような身体の動きと音が連動するような楽器環境において、子ども自らが音をつくることに興味を持たせ、コミュニケーションに「音」という存在を感じ探究心を刺激する。

活動経過報告

- ・夏休み最終週に打楽器を中心とした楽器を購入、2階和室に楽器コーナーとして設定。



- ・2学期スタートの9月1日よりコーナー開始。和室は保育者が決めた時間に利用できるようにし、一緒に音の出し方等の説明やiPhone、スピーカーを使い、童謡やアニメ等の曲を流しそれに音を合わせるなどした。BGMがあった方が目安になり音出しを楽しむ子どもと、まったくそれに関わりなく好きな楽器を好きなように扱う子どもがいた。木琴、鉄筋、太鼓等本来のバチやマレットを使うことなく自身で音を出す子もいた。年長児等でピアノのレッスンを受けている子たちは音階にこだわり、演奏すること

を好んだ。ミュージックポンプやミュージックパットで「音当てクイズしよう」と保育者や他児誘う姿があった。



・楽器の使い方や音の出し方を子ども同士で伝えあったり、特に年長児が年少児や特別支援の子に教える姿があった。また特別な気質を持った子は特に音に敏感で、繰り返し楽器を叩いたりしていた。





・10月年少組で楽器の説明と楽器で遊ぼうの時間をつくり、みんなで音を出してみようの活動をした。

年少児は色々な楽器の音や音の出し方を楽しんだ。踏んだり、手を振ったり、ジャンプしたりと身体表現としての活動も含んだ。

その後2階で保育者管理のもと展開していた楽器コーナーを1回の子どもホールに移し、子ども達が好きなタイミングで楽器遊び、音遊びが出来るようにした。



・学年が入り乱れてとりついている姿が増えたが、一人で黙々と楽器ごとの音の違いや叩き方の違い、音の違いに関してを持つ子もいた。ただ、このころから、楽器の不都合な扱い(マラカsWith太鼓をたたいたり、木琴を叩く、カホンをマレットでたたく等)が目につく。



- ・満3歳児も興味を持ち始め、コーナー名他学年がない時を見計らって音を楽しむ姿があった。ミュージックパットの上をバランスとりながら、足の動きと体重移動でドレミの順番で両足飛び。運動遊びと音遊びの連携。未就園の2歳児親子もコーナーでコミュニケーション。会話のきっかけになっていた。



- ・11月、発表会の合奏が近づきクラスでの合奏とコーナーでの楽器遊びがリンクしつつ時には全く別物としての遊び、時には大きい組の合奏をまねて、と言葉以外の子ども同士の間が見られた。



- ・子ども同士の繋がり、他学年の模倣、保育者の模倣、繋がり子どもは園内のすべての人間関係や環境を基に自分の考えた音やリズムを少しずつ身につけていっている様でした。音楽や楽器の扱いは大人中心となることが現場では多いと思い、今回なるべく保育者は近くで見守りながら進める事を大切にしました。ただ、年長児等の形や完成した音楽を求める子ども達もいる事で、子ども達の探求する方向性の多様性に寄り添うことの難しさを保育者間で共有した。

一方、常設コーナーにすることで子ども達の興味関心に即対応できることと、逆に管理の難しさが課題となった。楽器を遊具に見立て遊ぶことへの許容範囲をどのようにするか、扱い方により破損することのリスクや対応等で保育者間でも片づけを重視することを主張する者、楽器はあくまで遊具とは違うので特定の時間と特定の子ども達での取扱いに限定することを主張する意見も出たが結論は出

ていない。子ども達が楽器の扱いにも気づく環境と配慮が次の課題です。



・3学期に入り、コーナー出す楽器の種類を限定して現在は様子を見ています。子どもがなるべく自由に選択でき、使い方、扱い方を考えられるようになって欲しいと思っています。今後も継続して購入した楽器を子ども達の身近に置いておきます。

以上

報告者 園長 河野 史郎